

調査報告 土浦市后塚古墳の測量調査

著者	石田 温美, 荒井 啓汰, 齊木 誠
雑誌名	筑波大学先史学・考古学研究
巻	29
ページ	69-83
発行年	2018-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00155248

調査報告

土浦市后塚古墳の測量調査

石田温美・荒井啓汰・齊木 誠

I. はじめに

后塚古墳は桜川の東側から土浦入りの北側にかけて続く新治台地の縁辺部に立地している¹⁾。同古墳から100mほど離れた近接地には王塚古墳が存在する(第1図)。王塚古墳は前期古墳に特徴的な柄鏡形の墳丘形態をもつ。そのため王塚古墳は后塚古墳と同じく古墳時代前期に築造されたと考えられる。土浦入りの最奥部では、古墳時代前期の首長墳としてまず后塚古墳が築かれ、次いで王塚古墳が築かれたとの見方が有力であった(滝沢1994・2017)。しかしながら近年の調査で王塚古墳の築造年代の見直しが行われ(滝沢2017)、后塚古墳の位置付けについても再考が急務であると考えられる。

后塚古墳については、1975年に土浦市史に簡略な測量図と報告文が掲載された(土浦市史編さん委員会編1975)。1985年に茨城大学考古学研究室によって測量調査が行われ、墳丘長65mの前方後方墳として測量図(第2図)が示された(茂木・水野・長洲1991)。出土遺物は報告されていないが、これまでの調査から后塚古墳は、①未発達な前方部をもつ前方後方墳であること、②埴輪や葺石をもたないこと、③自然地形を利用していることが指摘され、古墳時代前期の築造と解釈されてきた。

しかしながら、既往の後塚古墳の測量調査では、墳丘の全体的な特徴は把握されたものの、公表された測量図には周辺地形などに関して不十分な点がある。また測量図からは同古墳の墳丘形態は前方後円墳であるようにも見受けられ、測量調査の報告者も后塚古墳が前方後円墳である可能性があるとしている。

今回の調査では、以上の問題意識を踏まえながら、①后塚古墳の詳細な墳丘形態や規模、②墳丘が周辺地形をどのように利用しているか把握することを目的とした。本調査の結果より、后塚古墳は自然地形を利用して築造された前方後方墳である可能性が高いことが示された²⁾。本稿ではその成果を詳しく報告す



第1図 后塚古墳と王塚古墳の位置 (1/5,000)

るとともに、周辺の前方後方墳の趨勢を整理し、后塚古墳の位置付けについて検討を加えたい。

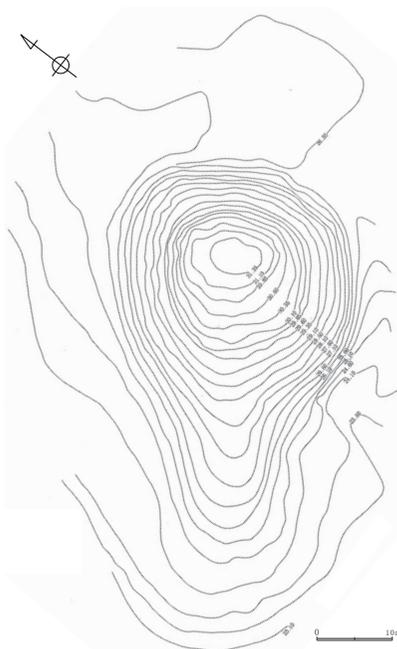
なお、今回の測量調査は、土浦市立博物館の依頼を受けた筑波大学考古学研究室（代表・滝沢 誠）が、平成 28 年度筑波大学社会貢献プロジェクト（課題名：博学連携による地域文化財の再生と利活用—土浦市内における重要遺跡の調査と成果の公開—）の一環として実施したものである。現地での調査は、筑波大学人文・文化学群人文学類の「考古学実習 C」ならびに同大学院人文社会科学研究科歴史・人類学専攻の「先史学・考古学基礎実習」として、2016 年 12 月 5 日～12 月 17 日の計 12 日間にわたって実施した。また、同年 12 月 21 日に有志による補足調査を実施した。調査担当者及び調査参加者は以下のとおりである。

調査担当者：滝沢 誠（筑波大学人文社会系・准教授）

常木 晃（筑波大学人文社会系・教授）

調査参加者：齊木 誠，石田温美（筑波大学大学院人文社会科学研究科），霜鳥太一，天羽涼花，荒井啓汰，

新井 遥，田中 遼，田邊えり，山本名織，脇園大史，小倉未優，加藤舜也，川井えみり，小室亮太，清水康寛，仙臺森大，平澤愛里，深見由利子（筑波大学人文・文化学群人文学類）
（石田温美）



第 2 図 后塚古墳の旧測量図 (1/1,000)

II. 古墳の位置と環境

后塚古墳は茨城県土浦市手野町に所在する（第 3 図 9）。同古墳の近接地には薬王寺の附属墓地があり、墳丘東側には墓地と薬王寺の仏堂をつなぐ道が存在する。墳丘東側の周辺地形は明らかにこの道及び墓地によって改変を受けている。后塚古墳の位置する台地上には土浦市内最大の前方向後方墳である王塚古墳（同図 8）が位置する（滝沢 2017）。王塚古墳は霞ヶ浦沿岸最古級の古墳であると考えられ、前述のように后塚古墳に後続して築造されたと考えられてきた。両古墳が位置する台地の基底部における標高は 22～25m、低地部との比高は 16～19m である。この小台地は新治台地に入り込む 2 つの谷によって約 200m の扇状を呈している。

后塚古墳の南東側に広がる台地上には、いずれも古墳時代後期の円墳であるドンドン塚古墳（第 3 図 10）と馬坂古墳（同図 11）が確認されている（茂木ほか 1984）。また、后塚古墳の東側に姫塚遺跡（同図 12）、その北東側に手野宮脇遺跡（同図 13）が存在し、採集された土器から古墳時代前期に属する遺跡であることがうかがえる（茂木ほか 1984）。発掘調査が行われていないため、遺跡の全容は明らかでないものの、后塚古墳や王塚古墳との関連が予想できる。このほか、后塚古墳の近隣で発掘調査が行われている古墳時代前期の遺跡として五斗落遺跡（同図 14）が存在する。この遺跡では古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されてお



第3図 后塚古墳周辺の古墳時代遺跡 (1/100,000)

1：常名瓢箪塚古墳，2：常名天神塚古墳，3：北西原遺跡，4：山川古墳群，5：宝積遺跡，6：東台遺跡，7：東台古墳群，8：王塚古墳，9：后塚古墳，10：ドンドン塚古墳，11：馬坂古墳，12：姫塚遺跡，13：手野宮脇遺跡，14：五斗落遺跡，15：大儘遺跡，16：下郷古墳群，17：田村舟塚古墳群，18：八幡脇遺跡，19：尻替遺跡，20：田宿天神塚古墳，21：赤塚古墳（網掛けは集落遺跡，黒丸及び黒枠は古墳・古墳群を示す。）

り，后塚古墳や王塚古墳との関連が注目される（柴・中根 1987）。

后塚古墳が築かれた新治台地の縁辺部には古墳時代の遺跡が数多く存在する³⁾。特に土浦市常名の遺跡群（同図1～4），同市手野町の遺跡群（同図8・9・12～14），かすみがうら市加茂東部（同図20・21）の遺跡群では前期古墳が集落遺跡をともなって確認できる。こうした状況から，土浦の北入り北岸一帯には，それぞれの古墳の造営主体となりうる複数の有力集団が，5km前後の領域を単位として割拠していた可能性が指摘されている（滝沢 2017）。

（石田温美）

Ⅲ. 后塚古墳の測量調査

1. 古墳の現状

后塚古墳は，現在スギなどの樹木によって墳丘が覆われている。特に前方部東側はタケが群生しており，見通しが悪い状態になっていた。墳丘北側や後方部東側には，現在も使用されている墓地が存在する。今回，測量調査を行うにあたって除草作業を行い，墳丘全体のように見通せるようにした。

本古墳は地形的には舌状に張り出す台地上に位置しており，東側から南側にかけて急傾斜になっている。この舌状の張り出しにあわせて前方部を南西に向けて築造されている。本古墳の南東約100mの地点には王塚古墳が存在している（第4図）。

（荒井啓汰）



第4図 后塚古墳と王塚古墳の位置 (1/1,000)

2. 測量調査の成果

(1) 測量の方法

本古墳の測量調査は、レーザーレベルによる標高点の観測とトータルステーションによる平面観測を組み合わせた方法で実施した。等高線は25cm毎とし、1/100縮尺の原図を作成した。基準となる標高は、古墳の南西約450mに位置する一級水準点（標高4.3121m）を利用し、水準測量によって古墳の後方部東側にベンチマークを設置した。測量の基準点に関しては、后方部頂に任意に設定した点を中心点（O点）とし、この中心点を通る墳丘の想定主軸線上に順次基準点を設置していった。さらにこの基準点から直角方向に基準点を増設し、測量を行った。

以上の方法によって作図された1/100の図面をトレースし、最終的に1/500の図に調整したものが第5図である。

(2) 後方部

後方部は北側および東側斜面が削られ、急傾斜となっている。上面平坦部の見かけ上の幅は14.5m、長さは13.8mを測り、いびつな長方形ないし楕円形状を呈するが、平坦面は明瞭でなく緩やかに傾斜しながら墳丘斜面へと続く。見かけ上の平坦面の稜線は、北側では31.75m、南側では30.75mの等高線付近に認められ、南側にやや傾斜していることが分かる。墳頂部の標高は31.047mである。

後方部斜面は北側と東側の斜面が削平されている。東側では墳丘が旧状を保っているように見えるが、標高27.00mから29.00mの間が急傾斜になっており、これは北側斜面の急傾斜の部分と一致しているため、この部分は削平を受けている可能性が高い。西側斜面は、北側と東側に比べて削平を受けていない。26.00mの等高線付近で墳丘の立ち上がりが認められる。西側斜面における墳丘傾斜角は27.5°である。旧状を留めている後方部西側裾部の傾斜変換線は、直線的ではあるが緩やかなカーブを描きながら後方部北側へと接続する。

鞍部においては、明瞭なくびれを認識することができない。東側・西側両斜面で、後方部から前方部へと緩やかに移行する。東側においては、後方部南東にコーナーが認められるようにも思われるが、これは東側側面が直線的に削平された結果生じたものであると考えられる。現状では後方部南西のコーナーは認められない。

(3) 前方部

前方部はさほど改変を受けていないと思われ、比較的良好に形状を留めている。平面的には、くびれ部から前方部前端にかけてすぼまる形状となっている。立面的には、後方部頂から緩やかに傾斜し、前方部上に明瞭な平坦面をもたないまま前方部前端に至る。これは後方部側の墳丘の流出と前方部前端部の墳丘の流出によるものと判断されるが、本来の墳丘形状が後方部から前方部前端に向かって緩やかに傾斜していた可能性がある。

前方部側面には大きな改変はみられない。断面C-C'においては、27.25mの等高線の付近に上面の傾斜変換を認めることができる。C-C'における前方部上面の標高は27.50mであり、墳頂部との比高差は約3.5mを測る。東側・西側斜面ともなだらかに傾斜しながら裾部へと

至る。断面 C-C' において、東側斜面では標高 24.75m の付近、西側斜面では標高 25.00m の付近で、それぞれ傾斜変換線を想定することができる。前方部側面の墳丘傾斜角は、東側斜面で 22.3°、西側斜面で 19.8° を計測する。

前方部前端斜面は上面の稜線が不明瞭であり、上面からなだらかに墳端へと至る。裾部の傾斜変換線は 25.25m の等高線の付近に認められ、前端は直線的な形状を呈する。前方部前端における南東隅および南西隅は角が明瞭ではなく、なだらかに前方部側面へと移行している。

(4) 外表施設

現状では段築や葺石は認められない。墳丘の表面では、土器等や埴輪の破片は一切採集されておらず、埴輪は樹立されていなかった可能性が高い。また、前方部南東側斜面に中世の五輪塔の一部が確認されている。

本古墳は舌状台地の先端に位置しており、墳丘南側は全体的に斜面となっている。そのため北側以外の墳丘外部には狭い平坦面しか認められず、周溝の存在を想定することは難しい。墳丘東側は、後世に造成されたと思われる道によって改変を受け、その現状は判然としない。墳丘西側は、自然地形に合わせて北東側から南西側へと下降しており、周溝の存在を想定することは難しい。墳丘の北側には、現在墓地になっている場所との間に幅 8m 前後の平坦な部分が認められる。現状では周溝を示す直接的な証拠は観察できないが、墳丘北側には周溝の存在が想定される。

隣接する王塚古墳においても、周溝の可能性は墳丘北側に限定されている（滝沢 2017）。本墳もこれと同様の構造となっている可能性がある。

(5) 現状での墳形と墳丘規模

后塚古墳の墳形と墳丘規模をまとめたい。墳形は現時点では前方後方墳と判断した。旧状を保っていると思われる後方部西側斜面が比較的直線的であること、後方部墳頂における等高線や傾斜変換線が直線的であることなどを評価している。また前方部は、短く前端が開かない形状を成しており、立面的にも前端に向かって低くなっている。周辺地域である茨城県南部における古墳時代前期の前方後円墳は、いずれも前方部の形状が后塚古墳のそれとは異なっており、現時点では后塚古墳を前方後円墳であると位置付けるのは難しい⁴⁾。そのため、本稿では前方後方墳である可能性を想定した⁵⁾。

墳丘規模について、本来は復元長を用いて記載すべきであるが、后塚古墳は後方部東側と北側を大きく削平されており、発掘調査を経ない状況での正確な復元案を提出することは難しい。そのため、本報告では現状での傾斜変換線をもとにした規模を提示するにとどめる。

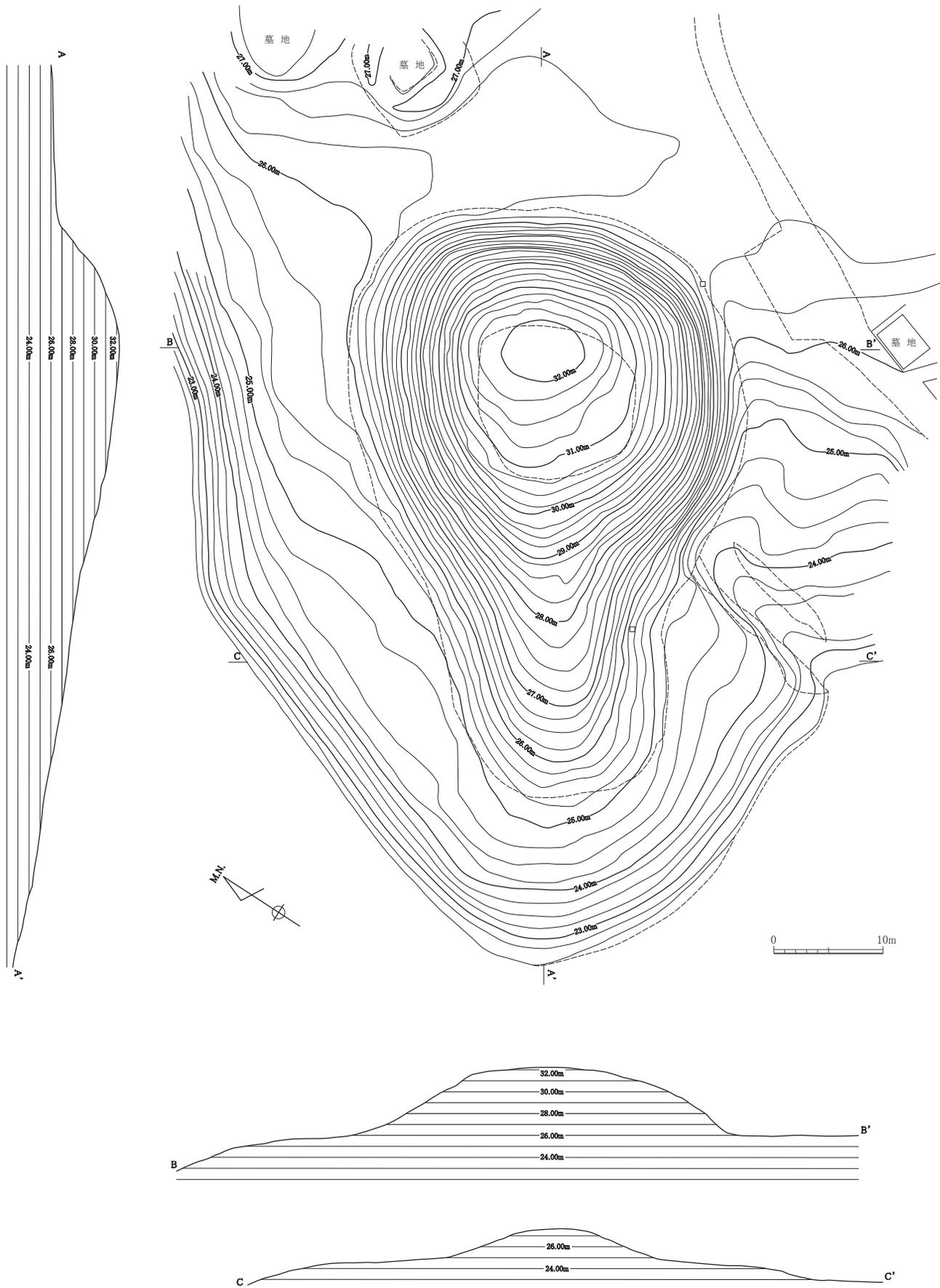
墳丘全長 53.8m / 主軸方位 (前方部方向) N-232°-E

後方部 長さ 35.4m 幅 36.4m / 墳頂平坦部 長さ 13.8m 幅 14.5m

/ 高さ (北) 5.45m (東) 5.61m (西) 5.41m

前方部 長さ 18.4m 前端幅 15.3m / 高さ (西) 1.80m (東) 2.53m

(荒井啓汰)



第5图 后塚古墳測量図 (1/500)

Ⅳ．考察

今回の調査によって、后塚古墳の詳細な墳丘データを得ることができた。また、くびれ部などの現況より墳形を特定することは難しいが⁶⁾、前方後方墳である可能性が高いと考えられる。そのため、以下の考察では、茨城県内の前方後方墳を改めて集成し、その分布と墳丘形態について検討する。

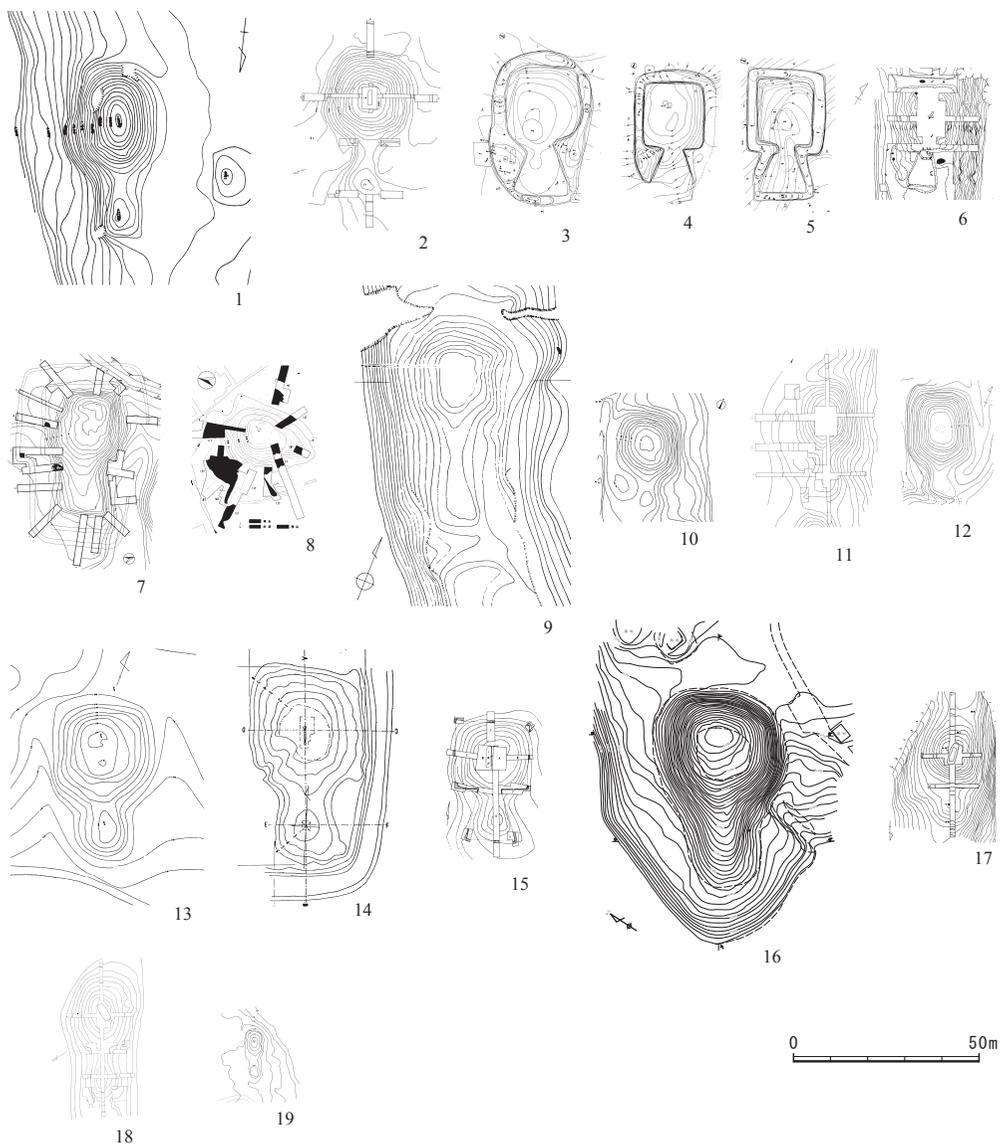
茨城県内の前方後方墳は、1985年の井上義安による集成によって11基が挙げられており(井上1985)、2007年の茂木雅博の集成では16基が認められている(茂木2007)。また茂木は上記の集成で前方後方墳の可能性のある古墳を3基示している。近年では財団法人茨城県教育財団による二の沢B遺跡の発掘において3基の前方後方墳が調査されている(財団法人茨城県教育財団2003)。

まず、茨城県内における前方後方墳の集成を改めて行った。その結果、茨城県内では19基の前方後方墳が認められ、2基にその可能性がある(第6図)。そして、河川流域ごとに前方後方墳の分布をみていくと、久慈川流域では、上流部に富士山4号墳、下流部に真崎5号墳が存在する。この流域では、茨城県下で最大の前期古墳である梵天山古墳や星神社古墳といった大規模な前方後円墳が分布している。那珂川流域では、上流部に二の沢B1号墳・2号墳・6号墳と安戸星1号墳が分布する一方で、周囲に目立った前期の前方後円墳はみられない。涸沼川流域では、中流部に宝塚古墳が存在する。こちらも、目立った前方後円墳は存在しない。一方で、河口部では姫塚古墳が分布し、近くに日下ヶ塚古墳と車塚古墳といった大規模な前方後円墳と円墳が存在している。霞ヶ浦の高浜入りには茨城県で最大の前方後方墳である勅使塚古墳が立地している。恋瀬川流域には、上流部に長堀2号墳と丸山1号墳が存在し、近隣に前方後円墳である佐自塚古墳が分布している。桜川流域では、上流部に狐塚古墳が分布する。同じ独立丘陵上には、全長100mを超える前方後円墳の長辺寺山古墳が存在する。河口部では后塚古墳と王塚古墳が存在する。霞ヶ浦の土浦入りでは、舟塚2号墳が存在する。また、赤塚古墳という前方後方墳が存在していたとされている(茂木1986)。赤塚古墳の近隣には、前方後円墳である田宿天神山古墳が存在している。北浦周辺では、大上1号墳と4号墳が前方後方墳として認められる。また、北浦東岸には大峰山1号墳が分布する。北浦東岸の南側には前方後円墳である伊勢山古墳が存在している。霞ヶ浦西岸の浮島には、独立丘陵上に原1号墳が存在する。県西部では前方後方墳の分布が希薄であるが、鬼怒川上流部の左岸に西山古墳が存在している。近隣に関本桜塚古墳があり、関連性が疑われる。

このように、前方後方墳は、県北と県央、鹿行、県南の一部に集中して分布している。そして、県西部は分布が希薄である。このことを分布図上で確認すると、桜川と霞ヶ浦西岸が分布の境界線になっていると考えられる。また、長辺寺山古墳と狐塚古墳、田宿天神山古墳と赤塚古墳、関本桜塚古墳と西山古墳との関係は、王塚古墳と后塚古墳と同様に前方後円墳と前方後方墳が連続的に築造されたものという可能性が疑われる。

次に、墳丘形態について検討を行う。前方後方墳の墳丘形態の研究は、大塚初重(大塚1956, 1962)⁷⁾や茂木雅博(茂木1984)⁸⁾、赤塚次郎(赤塚1992)などによって行われている。今回は、赤塚による研究を参考にする。赤塚は、前方後方墳で全長45mまでのものをA型、それ以上のものをB型としている。そして、前方部幅が後方部幅以下のものをI類、前方部

土浦市后塚古墳の測量調査



第7図 茨城県内の前方後方墳 (1/2,000)

1：富士山4号墳，2：真崎5号墳，3：二の沢B1号墳，4：二の沢B2号墳，5：二の沢B6号墳，6：安戸星1号墳，7：宝塚古墳，8：姫塚古墳，9：勅使塚古墳，10：大上1号墳，11：大上4号墳，12：大峰山1号墳，13：長堀2号墳，14：丸山1号墳，15：狐塚古墳，16：后塚古墳，17：舟塚2号墳，18：原1号墳，19：西山古墳

※出典は第1表の文献を参照

第1表 茨城県内の前方後方墳

No.	古墳名	所在地	全長	前方部長	後方部長	前方部長/ 後方部長	前方部幅	後方部幅	赤塚分類		文献
									型	類	
1	富士山4号墳	常陸大宮市	48	14	30	2.3/5		26	B	I a	大宮町史編さん委員会編1977
2	真崎5号墳	東海村	39.1	22.86	23.50	4.9/5		21.17	A	I b	茨城大学人文学部考古学研究室編2006
3	二の沢B1号墳	水戸市	35.1	12.9	22.2	2.9/5	14.5	20.1	A	I a	財団法人茨城県教育財団2003
4	二の沢B2号墳		27.5	9.5	18.0	2.6/5	12.0	16.1	A	I a	
5	二の沢B6号墳		31.0	12.0	19.0	3.2/5	12.0	14.8	A	I b	
6	安戸星1号墳		28.3	9.6	18.7	2.6/5	8.1	16.0	A	I a	安戸星古墳調査団編1982
7	宝塚古墳	茨城町	39.3	18.8	20.5	4.6/5	16.5	19.5	A	I b	茨城町史編さん委員会編1985
8	姫塚古墳	大洗町	30.0	8.0	22.0	1.8/5	12.3		A	I a	大洗町教育委員会2013
9	勅使塚古墳	行方市	64	34	30	5.7/5	18	30	B	I c	大塚・小林1964
10	大上1号墳	鉾田市	35	11	24	2.3/5	10	22	A	I a	茨城大学考古学研究室編1994
11	大上4号墳		30	10	20	2.5/5	10	13	A	I a	
12	大峰山1号墳		31	9	22	2.1/5	9.5	18	A	I a	
13	長堀2号墳	石岡市	46	16	28	2.9/5			B	I a	早稲田大学考古学研究室1973, 茂木1986
14	丸山1号墳		55	25	30	4.2/5	18	34	B	I b	後藤・大塚1957
15	狐塚古墳	桜川市	44	22	22	5/5	22	25	A	I b	西宮1969
16	后塚古墳	土浦市	53.8	18.4	35.4	2.6/5	15.3	36.4	B	I a	
17	舟塚2号墳		25	7	18	1.9/5		10	A	I a	木崎・茂木編2000
18	原1号墳	稲敷市	29	11	18	3.1/5	7	11.5	A	I b	茂木編1976
19	西山古墳	筑西市	20				7	7	A	II	木崎・茂木編2000

1)全長，前方部長，後方部長，前方部幅，後方部幅の単位はm。

2)前方部長/後方部長の数値は小数点第二位以下を四捨五入。

3)No.は第7図の番号と同一。

幅と後方部幅が同じか前方部幅が後方部幅を凌駕するものをⅡ類に区別した。そして、前方部長が後方部長の3/5未満のものをa類、3/5～5/5のものをb類、5/5以上のものをc類と分類している（赤塚1992）。

この分類方法を適用すると、茨城県下の前方後方墳は14基がA型の前方後方墳となる。この中でIa類のものは8基（二の沢B1号墳、二の沢B2号墳、安戸星1号墳、姫塚古墳、舟塚2号墳、大上1号墳、大上4号墳、大峰山1号墳）となり、Ib類が5基（真崎5号墳、二の沢B6号墳、宝塚古墳、狐塚古墳、原1号墳）、Ⅱ類が1基（西山古墳）となる。B型の前方後方墳は5基となり、Ia類は3基（富士山4号墳、長堀2号墳、后塚古墳）となる。Ib類は丸山1号墳、Ic類は勅使塚古墳のみである（第7図）（第1表）。

このように、茨城県内の前方後方墳は、45m以下の小型のものが主流であり、全体的にも前方部が短く狭いものが中心である。前方部の長い勅使塚古墳は茨城県内で最大の前方後方墳であること、西山古墳は県西部で唯一の前方後方墳であることから、上記の前方後方墳とは性質が異なる可能性が考えられる。

そして、后塚古墳は、茨城県内で多くみられる短く狭い前方部を持ちながら大型化した前方後方墳であると考えられる。

最後に、今回の調査では、土器などの表面採集ができなかった。そのため、后塚古墳の年代を特定することは困難であった。今後発掘調査が行われることよって、築造時期や墳形の問題が解明されることを期待したい。（齊木 誠）

V. おわりに

本稿では、あらたに実施した后塚古墳の測量調査について報告するとともに、測量調査で得られた詳細なデータに基づいて后塚古墳の位置付けについて考察を行った。茨城県内の前方後方墳の分布と墳丘形態について考察したところ、本稿では后塚古墳は茨城県内の他の多くの前方後方墳と同様に短く狭い前方部を持つが、その墳丘規模は比較的大型であることを指摘した。

前述のように、今回の測量調査では后塚の年代を特定する根拠は得ることができなかった。しかしながら、今回の調査の目的である①后塚古墳の詳細な墳丘形態や規模、②墳丘が周辺地形をどのように利用しているか把握すること、のおおまかな部分は達成できたと思われる。今後行われる発掘調査に向けて、今回の測量調査報告が有益なデータとなれば幸いである。

（石田温美）

謝辞

后塚古墳の測量調査に際しては、地権者である入江善一氏、大久保清氏に調査実施についてご快諾をいただくとともに、手野町区長の小野 豊氏、薬王寺（総代・大塚勅男氏）にご協力をいただいた。

現地での調査にあたっては土浦市教育委員会、土浦市立博物館、上大津公民館にご協力をいただくとともに、下記の方々から有益なご助言を賜った。

大村冬樹、亀井 翼、黒澤春彦、塩谷 修、長谷川敦章、茂木雅博（五十音順、敬称略）
本報告の執筆にあたっては調査担当者の常木 晃先生、滝沢 誠先生に多くのご助言を賜った。

また、図版の作成には、筑波大学人文・文化学群学群生の浅野孝利氏、後藤美紅氏、平澤愛里氏にご協力いただいた。皆さまに末筆ながら記して感謝いたします。

註

- 1) 霞ヶ浦には、出島半島を挟んで北西方向にのびる二つの大きな入り江があり、北側は「高浜入り」、南側は「土浦入り」と呼ばれている。このうち、土浦入りの最奥部では筑波山の西側を南流してきた桜川が河口を開いている。
- 2) 測量結果から后塚古墳は前方後方墳の可能性が高いと判断し、本稿では各名称について前方後方墳とした場合の呼称を用いている。
- 3) 后塚古墳周辺古墳時代遺跡については『筑波大学先史学・考古学研究』28号に掲載された王塚古墳の調査報告に詳しい(滝沢 2017)。
- 4) 例えば、石岡市熊野古墳(田中 1997) やつくば市山木古墳(上川名ほか 1972) の前方部は前端に向かって開く形状をしているほか、美浦村観音山古墳(大竹ほか 1981)などは前端がやや高くつくられており立面的に后塚古墳の前方部とは異なる。
- 5) ただし、後方部北側と東側は削平されているためその形状を判断することができない。本稿での前方後方墳という認識は今回の測量結果に基づいたものであり、今後の調査成果によっては前方後円墳と判断される可能性も十分に存在する。
- 6) 井上は后塚古墳が前方後方墳であることには慎重な立場を示しており(井上 1985)、茂木も前方後方墳との断定は避けている(茂木 2007)。
- 7) 大塚は、前方部の幅と高さから3つに分類し(大塚 1956)、後にA～Dの4つに細分している(大塚 1962)。
- 8) 茂木は、後方部幅と前方部幅、前方部長と前方部幅、後方部長と後方部幅、後方部長と前方部長、後方部高と前方部高を比較している。そして、発掘調査によって判明した平面形態から、5つの類型を提唱している(茂木 1984)。

参考文献

- 安戸星古墳調査団編 1982 『常陸安戸星古墳』。
- 赤塚次郎 1992 「東海系のトレース - 3・4世紀の伊勢湾沿岸地域-」『古代文化』第44巻6号 35-49頁。
- 井 博幸 2017 「中野富士山古墳の調査と久慈川中流域の前期・中期古墳」『第39回茨城県考古学協会研究発表会資料』 15-22頁。
- 井上義安 1985 「第八章 茨城県の前方後方墳と宝塚古墳」『茨城町宝塚古墳』21-23頁。
- 茨城大学考古学研究室編 1994 『大上古墳群第4号墳発掘調査報告』。
- 茨城大学人文学部考古学研究室編 2006 『常陸真崎古墳群』
- 茨城町史編さん委員会編 1985 『茨城町宝塚古墳』。
- 岩井市史編さん専門委員会自然考古部会編 1996 『岩井市の遺跡Ⅱ』。
- 大洗町教育委員会 2013 『車塚古墳(くるまづかこふん)・姫塚古墳(ひめづかこふん)』。
- 大竹房雄ほか 1981 『塚原古墳群第1号墳(観音山古墳)調査報告書』美浦村教育委員会。
- 大塚初重 1956 「前方後方墳の成立とその性格」『駿台史學』第6号 38-65頁。
- 1962 「前方後方墳序説」『明治大学人文科学研究所紀要』第1冊 1-59頁。
- 大塚初重・小林三郎 1964 「茨城県勅使塚古墳の研究」『考古学集刊』第2巻下 103-122頁。
- 大宮町史編さん委員会編 1977 『大宮町史』。

- 上川名昭ほか 1972 『茨城県筑波町山木古墳』茨城県考古学会.
- 木崎 悠・茂木雅博編 2000 『常陸の前方後円墳 (1)』茨城大学人文学部考古学研究室.
- 後藤守一・大塚初重 1957 『常陸丸山古墳』山岡書店.
- 財団法人茨城県教育財団 2003 『二の沢 A 遺跡・二の沢 B 遺跡 (古墳群)・ニガサワ古墳群』.
- 柴 正・中根節男 1987 『霞ヶ浦用水建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告書第 43 集 茨城県教育財団.
- 滝沢 誠 1994 「筑波周辺の前古墳時代首長系譜」『歴史人類』22 151-174 頁.
- 2017 「霞ヶ浦沿岸の前期前方後円墳 - 土浦市王塚古墳の測量調査 -」『筑波大学先史学・考古学研究』第 28 号 77-94 頁.
- 滝沢 誠ほか 2014 「つくば市水守桜塚古墳 2012 年度発掘調査概要」『筑波大学先史学・考古学研究』第 25 号 81-95 頁.
- 2015 「つくば市水守桜塚古墳 2013 年度発掘調査概要」『筑波大学先史学・考古学研究』第 26 号 89-98 頁.
- 田中 裕 1997 「茨城県千代田町熊野古墳の測量調査」『先史学・考古学研究』第 8 号 107-118 頁.
- つくば市教育委員会 2015 『つくば市内遺跡 - 平成 26 年度発掘調査報告 -』.
- 2016 『つくば市内遺跡 - 平成 27 年度発掘調査報告 -』.
- 土浦市史編さん委員会編 1975 『土浦市史』土浦市.
- 西野元編 1991 『古墳測量調査報告書 I - 茨城南部古代地域史研究 -』筑波大学歴史・人類学系.
- 西宮一男 1969 『常陸狐塚』.
- 勾玉工房 Mogi 編 2014 『明神遺跡 (牛久城跡外郭部・明神塚 1 号墳)』牛久市教育委員会.
- 茂木雅博 1984 『前方後方墳』雄山閣出版.
- 1986 「常陸の前方後方墳」『國學院大學考古学資料館紀要』第 2 輯 48-71 頁.
- 2007 『常陸の古墳』同成社.
- 茂木雅博編 1976 『常陸浮島古墳群』浮島研究会.
- 茂木雅博ほか 1984 「土浦の遺跡 - 埋蔵文化財包蔵地 -」土浦市教育委員会.
- 茂木雅博・水野佳代子・長洲順子 1991 「土浦市における古墳の測量」『博古研究』創刊号 49-60 頁.
- 茂木雅博・田中裕貴編 2005 『常陸の前方後円墳 (2)』茨城大学人文学部考古学研究室.
- 早稲田大学考古学研究室 1973 「福田古墳群第 9 号墳・長堀古墳群第 2 号墳・柏崎古墳群富士見塚古墳の測量調査」『茨城考古学』5 24-31 頁.
- 早稲田大学考古学研究会編 1976 『金鈴 北浦東岸 (茨城県鹿島郡鹿島町・大野村・大洋村) における考古学的踏査及び測量調査報告』

挿図出典

- 第 1 図 滝沢 2017 (一部改変)。
- 第 2 図 茂木雅博・水野佳代子・長洲順子 1991 (一部改変)。
- 第 3 図 滝沢 2017 (一部改変)。
- 第 4 図 筆者作成。
- 第 5 図 筆者作成。
- 第 6 図 筆者作成。
- 第 7 図 各遺跡の報告書掲載図をもとに筆者作成。

研究活動報告

『筑波大学先史学・考古学研究』第28号

考古学実習（茨城県土浦市・山王古墳）

常木 晃, 滝沢 誠, 河嶋優輝, 沙 小宇（期間：2017年12月4日～15日）

先史学実習（茨城県つくば市・学内）

谷口陽子（期間：2018年1月15日～19日）

常木 晃 イラク・クルディスタン自治区スレマニ地域の考古学的調査（Turkaka 遺跡の試掘調査, Charmo 遺跡の踏査, Yasin Tepe 遺跡の発掘調査）。「ザグロスの先史時代遺跡調査から見たホモ・サピエンスの拡散問題」『西アジア文明学の創出2：古代西アジア文明が現代に伝えること』、「肥沃な三日月地帯東部の新石器化—イラク・クルディスタン, スレマニ周辺の先史時代遺跡踏査（2016年）」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集（平成28年度考古学が語る古代オリエント）』（共著）。「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン, ヤシン・テペ考古学プロジェクト第1次（2016年）」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集（平成28年度考古学が語る古代オリエント）』（共著）。「西アジア文明学の構築」, 「西アジアにおける現生人類の拡散ルート—新仮説の検証—成果報告」『現代文明の基層としての古代西アジア文明 Newsletter』, 「書評 小泉龍人著『都市の起源—古代の先進地域—西アジアを掘る』」『西アジア考古学』18, 「西アジアのテル型遺跡に関するフィールド調査の技術的革新と展望—イラク・クルディスタンの調査事例から—」『西アジア考古学』18（共著）, 「学会設立20周年記念セッション：モニュメントと古代社会：趣旨説明」『日本西アジア考古学会第22回総会・大会プログラム』, 「イラク・クルディスタンの考古学事情」『月間考古学ジャーナル』703, 「西アジア型農耕社会の誕生」『アジアの考古学3：農耕の起源と拡散』, 「西アジア考古学の現在地」『季刊考古学』141, 「日本によるシリア調査の歴史」『世界遺産パルミラ 破壊の現場から：シリア紛争と文化遺産』, Tarikh Suria fi Mia Muwaqa Ashariya（100の遺跡が語るシリアの歴史：アラビア語版）（共著）, The burial of Neolithic blade producer. *Al-Rāfidān* 38. Chapter 1. The significance of research on the emergence of pottery in West Asia, Chapter 11. The emergence of pottery in northeast Iran: The case study of Tappeh Sang-e Chakhmaq, *The Emergence of Pottery in West Asia*. 1. Qalb Lozeh photogrammetry project, in A Series of Photogrammetry for Protection of Syrian Cultural Heritage. *Ancient Villages of Northern Syria Vol. 1 QALB LOZEH*. Opening remarks for the session “Saving the cultural heritage for the next generation”, in *The Silk Road Friendship Project, Saving the Syrian cultural Heritage for the Next Generation: Palmyra, A Message from Nara, Program and Abstracts*. 「シリア内戦下の文化遺産保護に関する国際協力」東洋学・アジア研究連絡協議会シンポジウム『東洋学・アジア研究の新たな振興をめざして』Part V—国際学術協力と情報発信—（口頭発表）, 「セカトレ：シリア文化遺産を守るのは心の問題」『国際報道2017』（奈良パルミラ会議での発表の様子とレバノンでの100sites本の配布の紹介）.

三宅 裕 トルコ, ハッサンケイフ・ホユック遺跡の発掘調査。「西アジア先史時代における定住狩猟採集民社会」『狩猟採集民からみた地球環境史：自然・隣人・文明との共生』, 「西アジア先史時代における工芸技術—パイロテクノロジーの系譜—」『現代文明の基層としての古代西アジア文明 Newsletter』7, 「西アジア新石器時代のモニュメントと社会」『日本西アジア考古学会第22回総会・大会要旨集』, 「揺らぐ新石器革命論—農耕・牧畜の起源と新石器時代の社会—」『季刊考古学』141, 「西アジア先史時代における工芸技術—パイロテクノロジーの系譜—」『西アジア文明学の創出2：古代西アジア文明が現代に伝えること』（共著）, The earliest pottery of Salat Cami Yani. *The Emergence of Pottery in West Asia*. Preference for fish in a Neolithic hunter-gatherer community of the upper Tigris, elucidated by amino acid $\delta^{15}\text{N}$ analysis. *Journal of Archaeological Science* 82（共著）, 「西アジア新石器時代のモニュメントと社会」『モニュメントと古代社会』（口頭発表）, Sedentary hunter-gatherer community at Hasankeyf Höyük. *Sedentism, subsistence and societies of Early Neolithic upper Tigris*（口頭発表）.

滝沢 誠 静岡県田方郡函南町瓢箪山古墳の発掘調査, 茨城県土浦市山王古墳の測量調査, 岐阜県本巣市船来山24号墳出土遺物（東京国立博物館蔵）の調査, 「伊豆半島の前期古墳と東日本太平洋岸域の拠点

形成に関する基礎的研究」(平成 29 年度科学研究費補助金・基盤研究 (C))。「博学連携による地域文化財の再生と利活用—土浦市における重要遺跡の調査と成果の公開—」(平成 28 年度筑波大学社会連携プロジェクト)。「霞ヶ浦沿岸の前期前方後円墳—土浦市王塚古墳の測量調査—」[筑波大学先史学・考古学研究]28。「王塚・后塚古墳が語る古代の土浦」筑波大学社会連携プロジェクト公開講座(土浦市上大津公民館)。

谷口 陽子 大エジプト博物館合同保存修復プロジェクト(壁画)(JICA)。「彩色分析のための手順と課題」。「彩色材料分析の成果と課題」彩色材料分析 WG 第 1 回研究会。「一宮市博物館蔵石造菩薩頭部彩色の分析」『帝京大学文化財研究所研究報告』17 集(共著)。Evaluation of the biodeterioration activity of lichens in the Cave Church of Üzümlü (Cappadocia, Turkey), *International Biodeterioration & Biodegradation*, 127 (共著)。「イスラームの国々でプレ・イスラームの遺跡をまもること」シンポジウム『西アジア文明学の創出 2』現代文明の基層としての古代西アジア文明(口頭発表)。「西洋的価値観がもたらしたイスラーム圏におけるプレ・イスラームのヴァンダリズム: カッパドキアとパーミヤーンの事例から」『政治的課題を抱える文化財の保護に関する研究会』(口頭発表)。

前田 修 トルコ、ハッサンケイフ・ホユック遺跡の発掘調査。「交易ネットワークの形成: 新石器時代における黒曜石・海産貝類の流通」『季刊考古学』141。Geographic mosaics and changing rates of cereal domestication. *Philosophical Transactions of the Royal Society, London B*, 372 (共著)。Experimental implications for flint heat treatment at Hasankeyf Höyük. *The exploitation of Raw Materials in Prehistory: Sourcing, Processing and Distribution*. Preference for fish in a Neolithic hunter-gatherer community of the upper Tigris, elucidated by amino acid δ 15N analysis. *Journal of Archaeological Science*, 82 (共著)。「古代西アジア 1 万年前の世界へ—遺跡と遺物が語る文明以前の人と社会」『第 2 回西アジア考古学トップランナーズセミナー』(口頭発表)。「西アジア先史時代の黒曜石交易」『第 59 回日本オリエンタ学会年次大会』(口頭発表)。「石器から見る穀物栽培の発展過程」『日本西アジア考古学会第 22 回総会・大会』(口頭発表)。The lithic assemblage from Hasankeyf Höyük: a continuity of the hunter-gatherer tradition. *Sedentism, Subsistence and Societies in Neolithic Anatolia: New Insights from Hasankeyf Höyük* (口頭発表)。Provenancing obsidian: a perspective from the Near East Majority and minority sources. *11th International Symposium on Knappable Materials*, “From toolstone to stone tools” (ポスター発表)。

荒 友里子 「冶金関連遺跡からみた中央アジア北部における專業の初現と度合い」『WASEDA RILAS JOURNAL』No. 5。「南ウラルとカザフスタンにおける青銅器時代銅生産遺跡の検討」『北アジア調査研究報告会学会』(口頭発表)。「冶金関連遺跡からみた中央アジア北部における專業の初現と度合い」『シンポジウム 考古学から捉える社会変化—モノづくりと專業化—』(口頭発表)。

辰巳 祐樹 「西アジアのテル型遺跡に関するフィールド調査の技術的革新と展望 —イラク・クルディスタンの調査事例から—」『西アジア考古学』18 (共著)。

宮内 優子 未成人骨から見た古代西アジア社会の再考(科学研究費)。「新石器時代における子どもの埋葬場所と年齢の関係—イラン、タベ・サンギ・チャハマックを例に—」『日本西アジア考古学会第 22 回総会・大会』(ポスター発表)。

ジャンモ・サリ Emergence of the First Cemetery: A Study on the Burial Location In the Ancient Near Eastern Societies.『考古学・歴史学・古典学の若手研究者による学際セミナー』(口頭発表)。The Role of Archaeology and Cultural Heritage in Building Society: A Lesson Learned from Japan. The Silk Road Friendship Project: Saving Syrian Cultural Heritage for the Next Generation-Palmyra: A Message from Nara. (口頭発表)。

ブライフリバル・久保・ペトラ スロヴェニア, リュブリャーナ大学文学部考古学学科及びスロヴェニア国立博物館での資料調査。イタリア, チヴィターレ・デル・フリウリ国立考古学博物館(資料調査)。「5~6 世紀の現スロヴェニア地方におけるゲルマン系戦士の副葬品—クラニ・ラユフ墓地を中心に—」『筑波大学先史学・考古学研究』28。Obdobje kofun na Japonskem (3~7. stoletje), s poudarkom na položaju ženskih poglavark. University of Ljubljana, Faculty of Arts, Department of Archaeology (講義)。

加藤 千里 「広町遺跡出土のガラス小玉について」『広町遺跡Ⅲ』。

久永 雅宏 「常総地域における滑石製品の生産と流通の一形態—七廻塚古墳出土土立花を中心に—」『土曜考古』39。

安井 千穂 研究課題：東地中海地域の紡織文化

齊木 誠 研究課題：関東東部における古墳時代前期の土器の移動と地域社会

石田 温美 「アナトリア新石器時代の調理用焼成遺構について」『筑波大学先史学・考古学研究』28. 「西アジア新石器時代における磨製石器と植物利用－石皿・石臼を中心に－」『平成29年度第2回歴史人類学会例会』（口頭発表）.

河嶋 優輝 「7世紀寺院の回廊柱間に関する統計学的分析と使用尺度推定」『日本情報考古学会第39回大会』（口頭発表）.

沙 小宇 研究課題：両漢魏晋時代における中原地域墳墓の埋葬頭位に関する研究